

意思決定者はナッジによる操作から逃れられるか

山田 歩¹

要約

ナッジはしばしば理性ではなく直感に働きかけ意思決定を操作する。本研究は、意思決定者がナッジによる操作をどれほど自覚しているのか、また、ナッジを開示することがナッジによる操作からの自由をもたらすのか、について検討した。実験1は、デフォルトの影響力を意思決定者の多くが自覚しないことを示した。実験2は、デフォルトを開示しても、意思決定者の多くはデフォルトの影響力を肯定しないこと、また、意思決定を修正しないことを示した。これらの知見がリバタリアン・パターナリズムにおいて持つ意味について考察した。

JEL 分類番号： D90, D91

キーワード： ナッジ, 操作, バイアス修正, デフォルト, 臓器提供

¹ 滋賀県立大学人間文化学部 ayumi.yamada@gmail.com

1. 目的

行動経済学の進展にともない、意思決定をおこなう文脈が、人間の意思決定や行動に強力なバイアスを与えることが明らかにされてきた。このバイアスは、日々の選択に望まざる結果をもたらす原因となる一方で、より良い選択を導くツールとして活用することもできる。Thaler & Sunstein(2008)は、意思決定の文脈がもつ影響力を用いて決定や行動に働きかけることを“ナッジ (nudge)”と名づけ、個人や社会に恩恵がもたらされるように意思決定の文脈を設計することが有用であると論じた。

ナッジは、個人や社会にもたらす恩恵が歓迎される一方で、個人の選択の自由や自律を十分に尊重しているのかについて疑念が向けられている (Bovens, 2008)。たしかに、ナッジは強制を伴わない。しかし、ナッジの多くは、意思決定者の自動システムに働きかける点で、操作的である (MacKay & Robinson, 2016)。ナッジに従わない自由が認められるとしても、ナッジに気づくことができなければ、意思決定者はナッジに抵抗することはできない。

こうした批判を受け、Thaler & Sunstein はナッジを開示することで、選択の自由や自律を確保することを提案している。選択アーキテクトは、ナッジの効果や意図を開示し、意決定者は開示された情報を参照することで、自分の決定をより自分のコントロールのもとに置けるようになると期待される。

しかし、ナッジの開示が意思決定者にナッジによる操作からの自由をもたらすことは自明とは言えない。バイアス修正研究からは、意思決定者はバイアスを自覚しにいくだけでなく、バイアスの存在を指摘されても、バイアスを修正することが困難であることが知られている (Wilson & Brekke, 1994)。ナッジの開示によって選択の自由を確保できるという主張は実証的に検証する必要があるだろう。

本研究では、ナッジの影響力を意思決定者がどの程度自覚しているのか、そして、ナッジの開示が選択の自由につながるのかを検討する。題材としては、臓器提供の意思決定を取り上げる。先行研究からは、オプトアウト方式の意思決定は、オプトイン方式の意思決定よりも、臓器提供の同意率を引き上げやすいことが明らかにされている (Johnson & Goldstein, 2003)。本研究は、この臓器提供の意思決定で観察されるデフォルトによる影響力を意思決定者がどの程度自覚しているのか (実験1)、並びにデフォルトの開示がその後の意思決定に与える影響を検討する (実験2)。

2. 実験1

2.1 目的

臓器提供の意思決定におけるデフォルトによる影響力を意思決定者がどの程度自覚しているのか検討する。実験参加者はオプトイン方式とオプトアウト方式どちらかの形式で臓

器提供に関する意思決定を行い、その後、デフォルトの影響力についてどれほど自覚していたか回答した。

2.2 方法

2.2.1 参加者

112名の大学生が実験に参加した。

2.2.2 手続き

調査用紙を用いて、以下の項目について順番にたずねた。

臓器提供の意思：「心臓」「肺」「肝臓」「腎臓」「脾臓」「小腸」「眼球」の7つの臓器についての提供意思をたずねた。参加者はオプトイン条件とオプトアウト条件のどちらかに割り当てられた。オプトイン条件の参加者は7つの臓器から「提供したい臓器」を選択し、オプトアウト条件の参加者は「提供したくない臓器」を選択した。

影響力の自覚：デフォルトが自身の決定にどのような影響を与えたと考えるかをたずねた。参加者は、臓器の「提供数が減った」、「影響を受けなかった」、「提供数が増えた」の3つの選択肢から1つを選んだ。

2.3 結果

臓器提供の意思：臓器提供の意思決定の結果を図1に示す。オプトアウト条件の参加者は、オプトイン条件の参加者と比べ、より多くの臓器を提供する意思表示をした ($F(1, 110) = 29.85, p < .01$)。

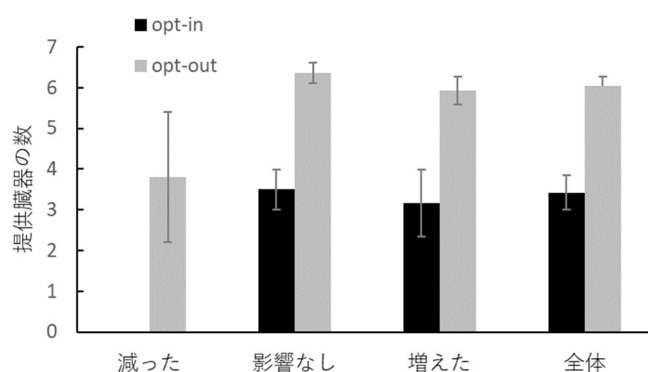


図1 提供臓器数の平均値

影響力の自覚：デフォルトの影響力に対する自覚を表1に示す。実験参加者全体の70%以上が、デフォルトからの影響を受けていなかったと回答した。また、デフォルトのタイプと影響力の自覚の間には連関がなく、オプトアウト条件とオプトイン条件の参加者はデフォルトの影響力を同じように認知していた ($\chi^2(2, N=112) = 3.54, ns$)。

表1 影響力の自覚（度数）

	減った	影響なし	増えた
opt-in	0	42	12
opt-out	5	39	14

臓器提供数×影響力の自覚：影響力の自覚ごとに、臓器提供数を集計した（図1）。「影響なし」と考えていても、オプトアウト条件の参加者は、オプトイン条件の参加者と比べ、より多くの臓器を提供する決定を行っていた（ $F(1, 79) = 25.53, p < .01$ ）。また、「増えた」と考えていても、オプトアウト条件の参加者はより多くの臓器を提供する決定を行っていた（ $F(1, 24) = 10.89, p < .01$ ）。

2.4 考察

先行研究と一致して、デフォルトは臓器提供の意思決定に大きな影響を与えた（Johnson & Goldstein, 2003）。さらに、影響力をどのように自覚したかにかかわらず、オプトアウト条件の参加者が一貫して、オプトイン条件の参加者と比べ、より多くの臓器を提供する決定をおこなう傾向があった。これらの結果から、デフォルトは、無自覚のうちに、意思決定に影響を与えることが示唆された。

3. 実験2

3.1 目的

実験2は、デフォルトの開示が臓器提供の意思決定に与える影響について検討する。実験1と同じく、まずデフォルトを開示することなく、実験参加者に臓器提供についての意思決定を求めた。次に、デフォルトの効果を開示し、改めて臓器提供の意思決定を求めた。

3.2 方法

3.2.1 参加者

45名の高校生ならびに大学生が参加した。

3.2.2 手続き

調査用紙を用いて、以下の項目を順番にたずねた。

臓器提供の意思（デフォルト開示前）：実験1と同じく、「心臓」「肺」「肝臓」「腎臓」「脾臓」「小腸」「眼球」の7つの臓器についての提供意思をたずねた。参加者はオプトイン条件とオプトアウト条件のどちらかに割り当てられた。

デフォルト開示後の影響力の自覚：臓器提供の意思決定においてデフォルトがもつ影響力について説明を与えた上で、今回の自身の決定がどのような影響を受けたと考えるかについて尋ねた。参加者は、臓器の「提供数が減った」か「影響を受けなかった」か「提供数が

増えた」のいずれかを選んだ。

臓器提供の意思（デフォルト開示後）：改めて臓器提供に関する意思表示を求めた。なお、参加者は1回目と同じデフォルト方式のもと意思表示を行った。

3.3 結果

臓器提供数：臓器提供数の結果を図2に示す。実験1と同じく、オプトアウト条件の参加者は、オプトイン条件の参加者と比べ、より多くの臓器を提供する意思表示をした ($F(1, 43) = 15.40, p < .01$)。また、臓器提供数は、デフォルトの開示前後で同じ水準であった ($F(1, 43) = 3.30, ns$)。

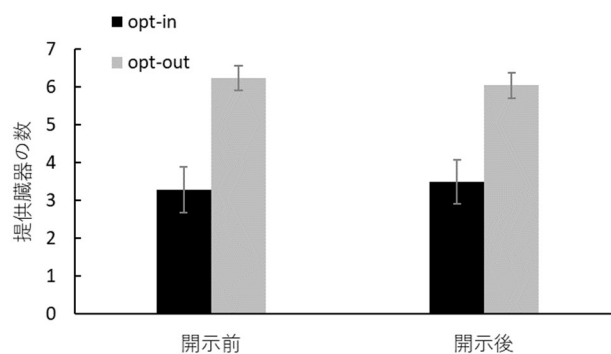


図2 デフォルト開示前と開示後の提供臓器数

影響力の自覚：デフォルト開示後のデフォルトの影響力についての自覚を表2にあらわす。参加者の大半（60% = 27/45）が自分はデフォルトの影響を受けていないと考えていた。ただし、実験1と異なり、「影響なし」と考える比率、並びに「増えた」と考える比率に、2つの実験グループで偏りが確認された ($Zs > 2.19, ps < .05$)。

表2 デフォルトの影響力の自覚と開示前後の臓器提供数の変化（度数）

自覚 行動	減った			影響なし			増えた		
	減らす	変わらず	増やす	減らす	変わらず	増やす	減らす	変わらず	増やす
opt-in	0	3	0	0	17	1	1	1	1
opt-out	0	1	0	1	8	0	3	8	0

影響力の自覚と臓器提供数の変化：デフォルト開示前から開示後の提供臓器数の変化を、影響力の自覚ごとに集計した（表2）。まず、デフォルトからの影響を受けなかったと考えた参加者の大部分（93% = 25/27）が2回目の意思決定で変更をしなかったことが確認される。さらに、影響を自覚しても、その影響力を相殺する方向で決定を変更した参加者はあまりい

なかった（22%=4/18）。以上から、全体として、1回目の選択から変更を加えない傾向が高いことが確認された。

3.4 考察

デフォルトを開示しても、半数以上の参加者が影響を受けなかったと考えていた。このことは、デフォルトの開示を受けても、意思決定者がその影響力を素直に認めないことがあることを示唆する。デフォルトの開示によって、デフォルトから影響を受けたと認めたとしても、多くの参加者はその影響を取り除かなかった。1回目の決定がアンカーとなって修正の障壁になった可能性を指摘できる。すなわち、オプトアウト条件の参加者が、たとえ提供数が増えたことを自覚しても、提供数を減らすことは、臓器提供の社会的意義から良心を痛める可能性があり、修正を困難にさせるかもしれない。またオプトイン条件の参加者も、たとえ提供数が減ったと自覚しても、提供数を増やすことには、心理的負担を感じることであり、躊躇されるかもしれない。

4. 総合考察

Thaler & Sunstein(2008)によれば、ナッジはパターナリズムとしての「選択の誘導」と、リバタリアニズムとしての「選択の自由」の混合体として特徴づけられる。重要なのは、パターナリズムとリバタリアニズムを実現する際に想定する認知システムが異なることである。選択の誘導には主に意思決定者の自動システムが想定され、選択の自由には熟慮システムが想定される。デフォルトが意思決定に大きな影響を与える一方で、意思決定者がその影響を自覚できず、自身の決定を十分に修正できなかった本研究の知見は、パターナリズムとリバタリアニズムが現実の意思決定で非対称に実現されている疑いをもたらす。

引用文献

- Bovens, L. (2008). The ethics of nudge. Grüne-Yanoff, T. & Hansson, S. O. (eds) *Preference Change: Approaches from Philosophy, Economics and Psychology*. Berlin and New York: Springer, Theory and Decision Library A.
- Johnson, E. J., & Goldstein, D. (2003). Do defaults save lives? *Science*, 302, 1338–1339.
- Mackay, D., & Robinson, A. (2016). The ethics of organ donor registration policies: Nudges and respect for autonomy. *The American Journal of Bioethics*, 16, 3-12.
- Thaler, R. H., & Sunstein, C. R. (2008). *Nudge: Improving decisions about health, wealth, and happiness*. New Haven: Yale University Press.
- Wilson, T. D. & Brekke, N. (1994). Mental contamination and mental correction: Unwanted influences on judgments and evaluations. *Psychological Bulletin*, 116(1), 117-142.